参加型給餌体験「タンチョウにドジョウ流し」実施報告

（公財）横浜市緑の協会　金沢動物園　〇繁成　美菜

1　はじめに

金沢動物園では、観覧する園路と展示場の間に堀（モート）があり、来園者とタンチョウとの距離は遠く、植栽に隠れて姿が見えないことがある。また、タンチョウは体高約 140 ㎝、両翼を広げると 200 ㎝ほどある日本では大型の鳥類であり、直接的な給餌体験は危険性が高く実施は困難である。

イベント「タンチョウにドジョウ流し」は、タンチョウが餌を食べる様子を来園者に安全に確実に観察していただくとともに、タンチョウに対して愛着と興味を抱いていただくことを目的に、観覧スペースから展示場まで竹を渡し、そこに参加者が「そうめん流し」の要領で生きたドジョウを流し与えることを楽しんでいただく参加型イベントである。本イベントは昨年度から開始したが、今年度改善を加え、参加者の反応や感想などを収集した。

2　実施方法と馴致

対象個体は、24 才のオス個体（愛称：タイラ）である。

実施は 9 月中の土曜・日曜、13 時 15 分から約 20 分間タンチョウ舎観覧スペースで行い、参加者には一人 1 回ずつ体験していただいた。餌となるドジョウ 30 尾と、それをいれる容器としてミルワームケース、コンテナ、小さなお子様用の踏み台を使用した（図 1）。また、観覧スペースから展示場までは、園内に自生する竹（約 5.5m）を切り出し、節を抜いたものを設置した。

実施にあたって、タンチョウは自分より大きな竹を警戒する高いため、竹本体とそこへ給餌することに対する馴致（馴らすための訓練）が必要であった。

昨年使用した竹を今年 7 月に用いて馴致を行ったところ、タンチョウは抵抗なく流れるドジョウを食した。観覧スペース側からドジョウが流れてくることをタンチョウが認識した事を確認したのち、老朽化が進み汚れも目立っていたため、再び園内の竹を新調した。また、昨年実施した課題として、タンチョウのもとへ流れつくドジョウが参加者から見づらい点が挙げられており、今回は竹の先に水を張ったプラスチックケースを置くことで改善を図った（図 2）。

タンチョウは新しい竹とプラスチックケースを警戒するが、流れるドジョウは認識できており時間をかけて捕食することができていた。7 月から 8 月の夏休み期間中 1 日 1 回を目安に馴致を繰り返し、その際は来園者に対し説明と「練習」として実際に参加頂いた。その結果、約 3 週間でスムーズな捕食が行えるようになった。

図 1　使用した道具

図 2　プラスチックケースに流れたドジョウを狙うタンチョウ

３　参加者の反応

イベントに参加される来園者は家族連れの方が多く、お子様だけでなく大人の方の関心も高かった（図3、4)。特に年齢を問わず多くの方が「そうめん流し」に反応しており、捕食の瞬間には感嘆の声が上がることが非常に多かった。体験後にタンチョウへ興味を抱く来園者も多く、生息地や食性などの生態についてたずねる方がいた他、飼育個体に関する質問や、「タイラ頑張って」などと愛称を繰り返し呼びかける方も多かった。来園者の質問に対する解答だけでなく、タンチョウの生態や、愛称の呼びかけ、飼育個体に関する情報について解説の中に取り入れることで、タンチョウや飼育個体に対して親しみや興味を抱く機会を作ることができた。

図３　タンチョウが捕食する様子を注視する参加者

図４　踏み台の上からドジョウを流す参加者

４　まとめ

竹を用いた「ドジョウ流し」という手軽で親しみやすく誰もが参加しやすい給餌体験を安全に実施することで、来園者から多くの注目をタンチョウに集めることができた。実施中は「素早く動く」「跳び上がる」「羽を広げる」「鳴き声を上げる」「頭頂部の変化」など、普段の展示だけでは見ることが少ない動作を、タンチョウにストレスを与えることなく来園者に観察して頂き、さらに会話や解説を交えることでタンチョウに対する興味や愛着を含めた教育的効果を高めることができた。

文化的に馴染み深い動物でもあるタンチョウに対して、来園者が興味や愛着を抱き理解に繋げられるよう、参加者への解説の工夫や、掲示物を充実させるなどの改善を図りながら、今後も本イベントを充実させていきたいと考える。